

ヘルマン・ヘッセと民族的思想

竹 岡 健 一

ヘルマン・ヘッセと民族的思想というテーマについては、もはや論じる余地はないと思われるかも知れない。と言うのも、ヘッセに関しては、第一次世界大戦以来の平和主義者という、かなり固定したイメージができあがっているからである。しかしながら、先行文献の中には、そうした見方と矛盾する情報もあり、そこから浮かび上がってくるイメージは、従来のものとは必ずしも一致しない。そこで、本稿では、ヘッセと民族的思想のかかわりについて批判的考察を加え、この問題に関する再検討の必要性を明らかにしたい。

1. ヘッセとナチズム

そこで、まずヘッセとナチズムの関係を再考したいのだが、その前に、第一次世界大戦に対するヘッセの対応について一言触れておきたい。と言うのも、すでにそこに、反戦の気持ちに関しては「筋金いり」¹⁾といったイメージとの矛盾が見られるからである。つまり、大戦勃発当時、ヘッセは自発的に軍隊に志願し、書簡では、「私たちはみな、むろん完全にドイツ的な志操を有する」とか、「私にとっては、群畜的人間の普通の生というものは、戦争より好ましいものではない」²⁾と述べており、「時代に典型的なドイツの代弁者」³⁾という一面も見せているのである。他方で、たしかにヘッセは、論説『おお友よ、この調子にあらず、より美しい音調を』(1914年)などで、平和を訴えてもいる。しかし、それらの発言もまた、今日で見れば、特に体制批判的なものとは言えず、そのなまぬるさを糾弾したのは、ショービニズムに駆られた一部の主戦論者だけであった。⁴⁾

続いて、ナチスの台頭してくる時代に目を向けると、まず問題となるのは、1931年に、ヘッセがベルリンの芸術アカデミー文芸部門を退会したことである。

その前年の選挙でナチスが第二党に躍進し、ファッショ化の危険が間近に迫っていた時点でのヘッセのこの態度は、アカデミー内外で民主的な力を強めようとするマン兄弟らの努力に水を差したばかりか、さらに悪いことに、「アカデミー内部の不適切な雰囲気を実証するもの」として、ヴィルヘルム・シェーファーなど民族的立場の作家から悪用された。⁵⁾ その結果、当時、世間では、ヘッセは「大ドイツ的、ショービニズム的作家の側に立っている」とみなされることもありながら、彼は、公の場でこの誤りを正す努力を怠ったと言われている。⁶⁾

この他、時代状況に対するヘッセのこうした認識不足は、論説において、ナチスと亡命者との生死を賭けた戦いを、「口論」⁷⁾ という軽い言葉で片づけている点にも表れている。また、ヘッセは、「両陣営から私たちがめがけて射撃が始まります」⁸⁾ との不満も洩らしているが、そこには、ナチスとその犠牲者を天秤にかけているような響きもあり、ナチ時代に彼が堅持した中立的立場の裏側に、ある種の処世術を垣間見ることのできるものである。実際、こうしたヘッセの態度は、亡命者の間にも不信を喚起せずにはいなかった。例えば、1936年1月19日の「パリ日刊新聞」で、ヘッセは、「フランクフルト新聞」に執筆を続けることにより、第三帝国の宣伝道具として一役買っているとの批判を蒙っている。⁹⁾

他方で、ナチスの側から見ても、ヘッセが一定の利用価値を有する作家であったことは、ナチスのイデオログであるアルフレッド・ローゼンベルクが、ヘッセをナチスの宣伝機関にも等しい「ヨーロッパ作家連盟」に獲得しようと画策したことにも表れている。¹⁰⁾ また、1937年、ヘッセの60歳の誕生日には、「ノイエ・レントシャウ」などにヘッセを讃える記事が掲載され、さらに、帝国著作院から出された『出版社団体の内密の通知』においては、帝国啓蒙宣伝相とナチ党当局の了解の下、ヘッセに対する攻撃と彼の作品の普及の妨害が明確に禁止されている。¹¹⁾ 実際、ナチ体制下で「好まれない」、ないしは「禁止された」と指摘される一方で、ヘッセの著作のうち、『昔の太陽軒で』(1908年)や詩集『生命の樹から』(1934年)は、1944年まで出版を認められていた。¹²⁾

このように、ヘッセは、他の反ファシスト作家とは違い、第三帝国においても作家としての存在を保持しえたという一面を有している。しかも、そうした待遇がヘッセから取り上げられたのは、第三帝国の末期にいたって、紙の欠乏という口実に基づいてに過ぎなかった。

さて、ここまで見てきた限りでも、第一次世界大戦以来の平和主義者というヘッセ像には、疑問符がつけられうるのではないだろうか。実際、先行研究の中には、ナチスに対するヘッセの態度はせいぜい「国内亡命」——しかもスイスという安全な地での——だとする見方も存在するのである。¹³⁾

2. ヘッセと郷土文学

続いて、ヘッセと郷土文学の関係についてである。文学史等で指摘されているように、保守的＝ファシズム文学は、その起源をすでに帝政時代に持っており、ナチスが「われらの文学」と称する傑作の多くは、ナチ政権成立以前に書かれていた。そのさい大きな役割を果たしたのが、いわゆる「郷土芸術」であり、それはやがて、民族主義のイデオロギーと融合し、典型的なナチ文学となった。すなわち、退廃や不健康が支配する都会には健全なドイツ人は育たないという、郷土文学の書き手の地方的頑冥さは、ナチスによって好感を持って迎えられたのである。¹⁴⁾

ところで、ヘッセは、「この問題の根底にあるのは、正しい、大変古い思想である」¹⁵⁾として、この郷土芸術の虜になった。実際、ヘッセの文学の中に、郷土芸術的なものを見出すことは、さして困難なことではない。すなわち、田舎的なものや自然に対する好み、隠遁や奇妙な一匹狼に対する好み、および大都市文化、資本主義、工業化に対する嫌悪などである。ヘッセの作品は、全体としてこうした価値体系の影響を蒙っており、とりわけ初期の作品はほぼ完全にそれと結びついている。と同時に、彼は、同様の傾向を有する作家を高く評価したり、親しく交わったりもしており、その中には、ナチ政権下で重きをなした作家も少なくない。例えば、ヴィルヘルム・シェーファー、イナ・ザイデル、パウル・エルンスト、エーミール・シュトラウスなどがそうだが¹⁶⁾、以下、

最後にあげたシュトラウスとヘッセの関係を詳しく見てみたい。

シュトラウスは、ヘッセと同じシュヴァーベン出身の詩人であり、1866年に生まれ、大学卒業後ブラジルへ移住し、農業に従事した後帰国、以後創作に専念した。主な作品に、『友人ハイン』（1902年）、『いのちの十字路』（1904年）、『ヴェール』（1920年）、『巨人の玩具』（1934年）などがあるが、郷土愛溢れる彼の作風はナチ政府に認められ、「国民文学の長老」¹⁷⁾、「声を荒らげるファシズム作家」¹⁸⁾ となり、1933年の肅正後のドイツ文芸院には、参事会員として名を連ねた。

このように、シュトラウスとヘッセは、一見まったく対照的に見えるが、実際には、両者の間に意外な共通点も見られる。例えば、シュトラウスの『友人ハイン』がヘッセの『車輪の下』（1906年）に影響を与えたこと¹⁹⁾、シュトラウスとの親交が、ヘッセがガイエンホーフェンで田舎風の生活を始めるきっかけとなったこと²⁰⁾、また1906年には、雑誌「南ドイツ」に編集者として共に参加し、1910年には、共同でドイツ民謡のアンソロジー『菩提樹』を出版したことなどである。

こうして、シュトラウスとヘッセは、当初、過度の近代化に背を向け、南ドイツの風土や自然、あるいはドイツ民族の伝統の中に避難所を求めるという点で、意気投合していた。両者の間に亀裂が生じたのは、第一次世界大戦中で、シュトラウスが特に国粹的な方向へ傾斜して行ったことに起因するようである。²¹⁾ その結果、すでに述べたように、ナチ時代には、シュトラウスは体制から重んじられることになる。それに対して、ヘッセはたしかに非難の言葉も発しているが²²⁾、他方で、シュトラウスに対して、その後も理解を示し続けているのである。例えば、1933年7月の日記において、ヘッセは、英雄主義と犠牲への用意といった時代の理想に対して、換言すればシュトラウスのような人たちが転向した理由について、一定の理解を示し、彼らの脱線の中には、民族と祖国を個人よりも上に置くより高い目標への献身があると述べている。²³⁾ また、1934年の書評では、ヘッセは、シュトラウスの小説『巨人の玩具』に見られる反ユダヤ主義を、二次的なテーマとして片づけ、この作品と作家への尊敬

がそれによって損なわれるものではないとしている。²⁴⁾ さらに、ヘッセは、1936年1月31日、シュトラウスの70歳の誕生日に、「新チューリヒ新聞」において、「この時代の最も重要なアレマンの詩人」、「ドイツ語の最も誠実な、最も力に満ちた管理人の一人」²⁵⁾ としてシュトラウスを讃えている。こうした過度の、民族的な響きが強く感じられるシュトラウス弁護もまた、反戦・平和主義者、あるいはコスモポリタンというヘッセのイメージを危うくするものであろう。

いずれにせよ、以上のように見たとき、シュトラウスとヘッセの近親性が最もよく表れているのは、郷土文学への関心であるが、このことは、すでに当時のゲルマニスティクにおいても認識されていた。例えば、昭和16年3月の「獨逸文學」において、今井喜久郎は、この二人を、「Landschaftsdichtung を代表する詩人」²⁶⁾ とみなしている。Landschaftsdichtung、つまり「風土文学」とは、後期郷土芸術の概念を民族主義・国民文学の立場から一層敷衍したナチス特有の文芸概念であり、「民族の生命が、血と土に依って作られると同様に言語と歴史に依って作られて形を取る一つの詩型」²⁷⁾ である。この風土文学に、シュトラウスの文学と同様に分類されうるならば、ヘッセの文学もまた、見方によってはナチ文学の中に取り込まれざるをえない。

ところで、この関連で触れておきたいのは、わが国における戦前のヘッセ受容を扱った論考において、宮下啓三が、軍国主義的なヘッセ受容を例外視し、多くの読者は、ヘッセの書物の中に超越的な静寂主義を求めたと述べていることである。²⁸⁾ 宮下は、軍国主義と静寂主義を対立させて考えているが、ここで思い出されるのが、ヘッセと似た自然詩人フリードリヒ・シュナックの文学が、当時は代表的な民族的文学とみなされたことである。例えば、昭和16年4月の「獨逸文學」において、エルヴィン・ヤーンは、自然から見捨てられた人間の孤独をうたった詩『都会の蝶』（1938年）などを引き合いに出しながら、シュナックを「獨逸の再生に貢献した人々の中の一人」²⁹⁾ として評価している。しかも、シュナックの詩と時代との関連について説明した行では、『二十世紀の神話』（1934年）におけるローゼンベルクの言葉が援用されている。すなわち、

「シュトルムと、ラーベと、ケラーの静寂はゲーテとワーグナーの偉大さと相並ぶものであり」、「最も静寂なものにさへも、永遠の生成とその存在の為の闘争を歌ふ永遠の獨逸の歌が鳴り響いてゐる」³⁰⁾ と言うのである。

この「『静かな』文學の価値」³¹⁾ という考え方は、ヘッセ文学にもそのまま当てはめられよう。要するに、国家主義的解釈と静寂主義というヘッセ文学に対する二つの態度は、一見対立しているように見えるが、実はそうではなく、アスファルト文学・退廃文学との対立という点では共通しており、両者ともに、ショービニズムに寄与しうるものなのである。これに関しては、「自然詩人としてのヘッセから洗礼をう」³²⁾ けた詩人であり、宮下の分類にしたがえば静寂主義的なヘッセ受容の代表者である尾崎喜八が、戦争中、配給のさつまいもを歌った『此の糧』(1942年)——それは、『愛國詩歌集・大東亞戦争』(大政翼賛會編, 1942年)にも掲載された——などの詩によって、銃後の模範的な姿として讃えられたことも無視できないと思われる。³³⁾ つまり、愛国主義に役立つ文学というのは、勇ましい戦闘シーンを描いたものに限られるわけではなく、この意味では、「自然詩人」ヘッセの文学とその受容もまた、決して無害なものとは言い切れないのである。

3. ヘッセ文学の民族的受容

さらに、ヘッセの文学が民族的立場から評価を受けたという事例は、今井の論考の他にも存在する。例えば、高橋健二の戦前のヘッセ受容がそれに当たる。高橋の戦前の国家主義的な立場についてはこれまでも論じられているが³⁴⁾、特にヘッセ研究という観点から考察されたことはない。しかし、昭和15年の著書『現代ドイツ文學と背景』などにおいて、高橋は、ヘッセをドイツ文芸院の院長を務めたハンス・ヨーストのような人物と同列に論じたり、ユダヤ文学の代表者ハインリヒ・マンに対し、ドイツ的作家としてヘッセをあげるなどしている。³⁵⁾ このように、高橋は、すでに戦時中、ヘッセを「ドイツ文學を代表する最も大きな存在」³⁶⁾ とみなしており、『車輪の下』を初め、少なくとも5冊の翻訳を出版していた。³⁷⁾

ところで、ここで注目すべきことは、高橋が、国粹的な立場をとると同時に、ヘッセを高く評価していたという事実である。この点、例えば、池田浩士は、1978年の訳書『ファシズムと文学——ヒトラーを支えた作家たち』の後書きにおいて、高橋の戦前・戦後の業績の「断層」について触れ、「ヒトラー・ドイツにたいして一貫して否定的な態度を堅持したヘルマン・ヘッセの諸作品のもっとも代表的な訳者」³⁸⁾となった点を、高橋氏の転向の指標とみなしている。しかし、今述べたように、実際には、高橋は、戦前からヘッセを翻訳・研究していたのであり、この意味では、高橋のもとに「断層」はなく、国家的思想とヘッセへの関心は矛盾していなかったのである。このことは、ある意味で、高橋の転向という問題自体よりも重要だと思われる。というのも、それは、ヘッセ文学がショービニズム的な立場の人々にも訴えるところを有していたことを意味するからである。

さらに、こうした民族的立場からのヘッセ評価は、当時のドイツにも見られる。例えば、ヴェルナー・マールホルツの1930年の著書『現代のドイツ文学問題・出来事・人物』において、ヘッセは、「民族性と郷土性」という節で、ヴィルヘルム・シェーファー、エーミール・シュトラウス、ハインリヒ・レルシュ、ヨーゼフ・ポンテン、ハンス・フリードリヒ・ブルンク、フリードリヒ・グリーゼ、ヘルマン・シュテアーといった後の主要なナチ作家とともに論じられている。マールホルツによれば、これらの作家は「いずれも大都会の人間ではなく、それぞれの郷土の土に愛着を感じ、それぞれの部族の伝統に根を下ろし、それぞれの郷土の民衆とともに生き、彼らの悲しみと喜びの告知者」³⁹⁾であり、「地方的風習と方言文学と民族的財産の新しい積極的・創造的な復活」⁴⁰⁾なのである。

4. 青年運動との関係

このように、ヘッセを当時の国民文学の代表者とする見方は、ドイツにも見られ、決してわが国での例外というわけではない。しかも、それらは、単なる誤解や曲解ではなく、一面においてヘッセ文学の本質をついているのではない

かと思われる。と言うのも、資本主義的文化や合理的思想に背を向け、人間の全的把握や自然との一体感の中に人間の救済を求めるヘッセの思想は、当時の同盟青年運動などとも共鳴する部分を有していると思われるからである。例えば、望田幸男と田村栄子は、伝統的な〈市民的世界秩序〉に安住できない知的苦悩を吐露している点で、ヘッセの『荒野の狼』（1927年）とナチス学生同盟との間に通底しているものがあることを指摘している。⁴¹⁾ 加えて、ここでは、こうした点を、『デーミアン』（1919年）を例に検討したい。

『デーミアン』が、第一次世界大戦によってアイデンティティー形成を損なわれた市民階級の青年たちの集団的欲求を満足させたことは、次のようなトーマス・マンの言葉によって、よく知られている。つまり、「それは不思議な正確さで時代の核心をつき、自分たちの間から自分たちの深奥の生活を告知する者があらわれたと思ひこんだ青年たちを広く魅了し、感謝の念を起こさせた」⁴²⁾ と言うのである。しかし、ヘッセ特有の「内面への道」に捕らわれるあまり、この作品の時代とのかかわりは、これまで十分明らかにされてこなかったように思われる。

この関連で特に注目すべきは、ハルトムート・ベーメも指摘しているように、この作品においては、社会における疎外経験を補償する手段として、「サブカルチャー的集団形成」、すなわち「模索者の同盟」⁴³⁾ というものがあげられていることであろう。また、W. E. ズュースキントも、すでに1929年の論文において、ジंकレールを「一面では主観的な個性探求から、他面では文明の営みから抜けでて、青少年運動が提供を約束したような協団体への逃げ道を求める若者のタイプ」⁴⁴⁾ であるとしている。加えて興味深いことは、この集団形成が、ある種の戦争肯定と結びついている点である。つまり、ロタール・ケーンによれば、この小説の結末では、運命の概念が、ニーチェの庇護のもとに新しい人間のエリートへの希望の中へ注ぎこむところで、根拠のない歴史宿命論へと急転し、「戦争勃発が、戦争自体が——ヘッセの平和主義と奇妙にアンビヴァレントな対立を示して——新しい人間にその生の意味が運命的に転がりこむ空間として理解」⁴⁵⁾ されているのである。

